

2010年度課題作文優秀作品

【小学部】 テーマ「言葉が変化していくこと」

M・Yさん（茅ヶ崎東小）

私は「言葉が変化していくこと」について賛成です。使いやすい言葉は、時代の流れによって変化していくものだと思います。

出れる・出られるの他にも、けど・けれど、やっぱ・やはりなど色々あります。昔の人からしてみれば、今の言葉は好ましくないと思うけれど、ファッションと同じで、言葉にもその時代にあった流行があると思います。大勢の人の前で話すときや、目上の人への話し方、手紙を書くときは、略語よりも正しい日本語を使うほうが良いと思います。それには、実際に使っている言葉が正しいか何なのかをきっちり知っている必要があります。

どちらにしても、正しく日本語を使って話したときは、まじめできちんと仕事ができ、みんなをひっぱっていけそうなイメージがあります。略した言葉を入れて話したときは親しみが持てて、仲が良くなれそうなイメージがあります。それぞれに良いところがあるので、時と場合によって使い分けをすると思います。

K・Tくん（都筑小）

ぼくは、言葉が変化していくことについて反対です。理由は、言葉は自分の気持ちや考えを相手に伝えたりする大切な役目をしているので、時代や場所の変化だけで言葉まで変えてしまうのは間違っていると思うからです。

確かに、友達など親しい人との間で本当の言い方とは少し違った言葉を話したりすることは、良いと思います。でも、初めて話す人や目上の人に「敬語」を使うように、やはりしっかりとした正しい言葉の方が、相手にとっても自分

にとっても良いことになると思うからです。相手にとっては良い印象を与え、自分にとっては、正しい言葉を身に付けることになりす。

「ななめつてる」。これは、ぼくがこの横浜で初めて聞いた言葉です。ぼくはこの言葉がどうやって出来たのか、未だに分かりません。最初聞いた時には何を言っているのかさえ分かりませんでした。意味は、「かたむいてる」ということだそうです。だれが、こんな言葉を言い出したのか聞くと、だれに聞いても、「知らない」という返事だけでした。

このように、いつ、だれが話し始めたかも分からない言葉や、意味も知らない言葉をぼくたちは、何気なく使っているのです。言葉は大切な物です。今使っている言葉が、どういう意味か、その言葉が相手にきちんと伝わるか、考えてみて下さい。

Y・Kさん（岡上小）

私は「言葉が変化していくこと」に反対です。理由は、昔からの言葉一つ一つに意味がこめられていると思うのでその言葉をいつまでも大切にしたいからです。

「出れる」の「ら抜き言葉」は意味は通じるけれど、「出られる」の方が相手も気持ち良くなれると思います。相手に対して「出れる」だとぶっきらぼうに聞こえます。「出られる」なら「出れる」と同じ意味でもやさしく聞こえます。ちよつとしたちがいで相手の感じ方もちがうのでやさしい「出られる」を使つた方が絶対良いと思います。

「全然大丈夫」や「全然できる」は少し違和感があるけれど私もつい自然に言ってしまう言葉です。けれどやっぱり言葉のリズムがくずれているのでまちがいだと思います。言葉には歴史と伝統、意味の他にも響きがあると思うので気をつけようと思いました。

しかし私は「全然」という言葉と「大丈夫」の間には相手に対して（心配してくれてありがとう）という他の感謝の意味もこめられていると思います。ぶっきらぼうにも聞こえないのでふだん生活している中で使ってもいいんじゃない

いか、とも思います。

「ら抜き言葉」は相手にとつてあまり気持ち良くないので絶対使わず昔からのやさしい言葉にしようと思えました。「全然大丈夫」は絶対正しくはないけれど、意味がこめられているので「これは問題だ」とか「すっごくおかし。変な言葉だしぶつきらぼうな言い方だ」とまではいかなのでそのことは別に言ってもおかしくないと思います。相手の気持ちや感じに気をつけて昔からの大切な意味と美しい言葉をこれからも使っていきたいと思えます。周りの人が「変化だ」と言つて気持ちが傷つくこと、意味は通じるけれど、心の底では傷つくことにはマネをせず、きれいなやさしい言葉で話すようにしたいと思えました。

【中学部】 テーマ「エスカレーターでのマナー」

H・Sさん (中川西中)

私は、文章Aの意見に賛成する。マナーを守ること、型が決まっていることを日本人は好むからだ。そもそもマナーとは何なのか。そこを考えていきたい。

レストランでフォークやナイフを端から使い、音を立てないように気をつける。これも一種のマナーだろう。しかし、マナーにはもっと大きな意味がある気がしてならない。日本人としてマナーをわかまえるとはどういう意味なのだろうか。

電車やバスでお年寄りの方に席をゆずるのは当然のマナーだが、少し勇気がいる。また、親切心を持たなくては決して出来ない行動である。しかし、これはマナーであつて守らなくてはいけない。そう考えると、マナーは「勇気や親切心を持つこと、礼儀をわかまえること」という意味になる。つまり、勇気や親切心が備われば、礼儀も自然と身に付く、あるいはその逆となるのだ。

エスカレーターでの片側追い越し方式もその一つではないだろうか。急いでいる人のことを思い、「お先にどうぞ。間に合うといいですね。」という気持ち

で場所を譲る何気ない行為が広まり、習慣付いたのではないかと私は考えた。誰かの小さな勇気と温かい心が皆の心に響き、想いが伝わったのだ。しかし、それを実行する勇気が足りない人も少なくないはずだ。そのために、声をかけられるとパニックになつて自分を責め、怒つてしまうというケースが出てきたのである。

文章Bに述べられているように二列に並んで乗った方が合理的だし、早く移動できる。にもかかわらず、日本人がそれをしないのは、きつと親切心があるからだろう。自分が急いでいるときにエスカレーターがぎゅうぎゅうだったとしたら誰だつて嫌な気になるものだ。

親切心から習慣付いたこの方式は、皆で快適に使うために定着したのではないかと私は思う。

O・Mさん (柿生中)

私は文章Bの意見に賛成です。

理由は、エスカレーターは本来、荷物が多くて階段を昇りづらい人や、体が不自由な人、お年寄りの方のためのものだと思うからです。急いでいるなら階段で行けばいいし、エスカレーターでわざわざ行く必要はないのではないのでしょうか。たしかに速度はエスカレーターを駆け上がるほうが速いですが、急がない人、あるいは体が不自由な人、お年寄りの方がたくさんいて、エスカレーターの前が混雑している場合もあるので、そういった時は階段のほうが混雑せずに速くいけると思います。

片側追い越し方式がマナーになつたのは最近のことで、まだ定着していないところもあります。だから、それがマナーというわけではなく、みんなやってくるからやっただけなのではないかと思えます。急いでいる人が階段で行けば、エスカレーター付近の混雑解消にもつながるし、エスカレーターで荷物がぶつかつてけがをすることもなくなるでしょう。安全にするためには、マナーを守る以前に、自分は階段に行ったほうがいいのか、見直す必要があります。エスカレーターが混雑していれば階段へ、混雑していなければエスカレーターに乗ればいいと思います。

学校でエスカレーターはバリアフリーだと教わりました。バリアフリーと言うことは、体の不自由な人やお年寄りの方のためにあることを示しています。だからといって、健常者が使ってはいけないわけではないのですが、バリアフリーを使いたい体の不自由な人、お年寄りの方は混雑していると使いづらいと思います。それに、足の不自由な人が人に押されて転んだりしたら危ないと思うし、荷物をたくさん持った人は充分に身動きがとれず、事故になる可能性もあるのです。急いでいる人はエスカレーターに乗らなくてもいいと思います。エスカレーターを利用する全ての人が安全に乗るには、体の不自由な人やお年寄りの方などを最優先に、混雑している時は安全を考え、階段に行くべきだと思っています。

S・Mさん（東山田中）

私は文章Bの意見に賛成です。

たしかに、文章Aの言っていることにも共感できますが、私は、片側追い越し方式がマナーだとは思いません。エスカレーターができた時から片側追い越し方式が人々の間で定着したわけではないと思いますし、ただいつのまにか、多数の人々がそれをマナーだと思うようになったのだと思います。

私はテレビのクイズ番組を見ていて、こんな問題を見ました。「エスカレーターは、片側に乗るのが一般的ですが、それはルールでしょうか」という問題です。答えは「それはルールではない」でした。エスカレーターの業者の人は「エスカレーターは基本真ん中に入り、両手もしくは片手で手すりを持ちます。」と言っていました。そのことから、片側追い越し方式を使うのが絶対ではないということがわかりました。

また、一つ疑問があります。なぜ多数の人々が片側追い越し方式を使うようになったのか。そのことを私は次のように思います。片側追い越し方式は、人々の親切な心からできたのだと思います。「私が真ん中に立っていると急いでいる人に迷惑がかかるので左にしよう」と。

現在の人々の中では「マナー」という言葉は、従わなければならないルール、

と知っている人がたくさんいると思います。しかし、マナーとは、その場に合ったふさわしい態度や動作を表します。

よって、エスカレーターに必要なマナーは、親切な心だと思います。

今までのことをまとめると、マナーは親切心。親切心は、迷惑をかけない片側方式などです。

私は、マナーを守れる人（その場に合った態度がとれる人）が、もっとたくさん増えてくれたらいいと思いました。

U・Aくん（奈良中）

私は文章Aに賛成だ。

それは「片側追い越し方式は、急ぐ人、急がない人、どちらにとっても合理的な方式」という考えに共感したからだ。文章Bの「二列に並ぶ方式」にするのと、一見スムーズに行くように思うが、急ぐ人はどうするのか。急いでいるのに順番がくるまでマナー良く待ってられるのか。そう考えて文章Aを選んだ。

たしかに十分な議論もされないまま、社会のマナーやルールとなってしまうのは良くないと思う。しかし、だからといってすべての事をいちいち議論して決めていたらきりが無い。だいたい議論する必要もないと思う。例え議論したとしても、結論が出るとは思えない。生活の中の細かいルールは決め事ではない。だれもが「大方それでいいのでは」といった暗黙のルールで成り立っているのがほとんどだと思う。しかし、小さい事故などが起こっているという事は見逃せない問題だと思う。だが、これも議論と言うよりポスターなどでルールを伝える方が効率が良いし、皆にわかりやすいと思う。

私はほぼ毎日エスカレーターに乗るが、急ぎたいときもあるし、ゆっくり乗っていたいときもある。ほんとに急いでいるときはおちおちエスカレーターになんか乗ってられない。だから、そういうときに片側がっていると自分のペースで行けるからいい。皆さんにも想像してほしい。自分が急いでいるのにエスカレーターがあいていない。そんな時、憤りを感じずにはいられないと思う。だから、エスカレーターの片側追い越し方式という考えに賛成である。

社会で暮らす人間としてマナーを守ることが大切なことだ。また、内容によっては、話し合って決める事も大事だと思う。しかし、このエスカレーターの場合、急ぐ人、急がない人、どちらにとっても合理的な「片側追い越し方式」の意見に私は賛成だ。

S・Sさん（金井中）

私は、文章Bの意見に賛成です。
最近、テレビや新聞などで、日本人はコミュニケーション能力に欠けている、という内容をよく目にします。私もそのとおりだと思います。

エスカレーターに乗るとき、どうしても急がなければならないのであれば、まわりにいる人に声をかけ、通らせてもらえばよいと思います。そうすることで、片側追い越し方式は、不必要なものになるのです。

日本人は、マナーだといってこの問題を放置していると思います。片側追い越し方式は、確かに合理的かもしれませんが、ただ、人と人のかかわり合いのなかで、最も大切なコミュニケーションが足りないのです。だから「片側追い越し方式」というルールをつくっても、事故が起きてしまうのです。それでは、全くといっていいほど意味がありません。

マナーというのは、他人への気配りだけではないかと思えます。人と人が言葉をかけ合い、時には注意をしたり、互いに理解をする。このようなことを、常に心得ておけば、自然とマナーというものが身につくと思いませんか。

K・Cさん（田奈中）

私は文章Bの意見に賛成だ。何故なら、混雑している中で人と人とがぶつかることは、とても危険だと思うからだ。そして、追い越された時に相手の荷物に自分に当たることによって不愉快にもなるからだ。

よく駅などでエナメルのバッグを背負った高校生がエスカレーターで人を追い越していくと、周りの人たちはとても嫌な顔をしているのを見かけることがある。それを見ていた私も良い気はしなかった。その時私は、大きな荷物を持

っている人にエスカレーターは利用してほしくないと考えた。しかし、考えてみると大きい荷物を持つ人ほど急いでいることに気がついた。そして危険性がなければ片側追い越し方式も良いのではないかと思った。

この二つのことを解消するためには、AとBの両方の良い部分だけを取り入れて、新しくルールを作る必要があると思う。

具体的には、エスカレーターの横幅を大きな荷物を持つ人が追い越しても周りの人に当たらない広さにすること。そして、追い越す人と動かない人の区別を線などで決めることなどだ。そして毎日エスカレーターを利用している人も考えれば、より工夫された案が出てくるだろう。

エスカレーターについて一人ひとりが見直し、全ての人が嫌な気持ちをせず安心して利用できるようなエスカレーターになってほしい。

O・Sくん（荏田南中）

私は文章Bに賛成です。

マナーというものは自然と定着するものですが、個人の心遣いを考えたエチケットと違い、立場の違い、状態の違いなどから必然的に悪いマナーという見方が出てきます。マナーやエチケットは、容易に定着するものの、改善・除去といった消滅を工程に加えた現象は、そう容易く起こせるものではありません。故に、マナーや法律といった規則は、必ずしも全ての利用者が合理的に利用できるわけではないと思います。

しかし、反対者を極少数におさめているのが規則というものです。事実、話し合いで決めるとなれば、合理的な決め方は多数決がセオリーだし、このようなマナー、エチケットにおいても、反対者が多ければ定着しません。だからと言って、反対者の生まれている規則が合理的かというところではありません。一人、それが子供であろうと、老人であろうと、障害者であろうと、ただ一人できえの反対者がいれば、その規則は全く合理的ではないのです。

ではどうすれば良いでしょうか。法律の場合は、日本国民全員が「利用者」のため難しいと思います。しかし、マナーの場合はそのマナーが適応されている者のみが「利用者」なので変更はそう難しくないと思います。しかし、それ

は人数による表面上の式であって、一度定着したマナーを変えることは難しいでしょう。よって、いま社会で必要とされているのは柔軟性だと思います。

現在、社会は法律、マナーといった「規則」でしばられすぎています。戦争によって、数々の発明家が生まれたように、規則の変更、もしくは規則を破る柔軟性といったものがなくては、感性の昇華ができず、より良い社会を作る事ができないのではないのでしょうか。

F・Sさん（東山田中）

私は文章Aに賛成します。なぜなら、片側追い越し方式というマナーは人々にとって大切なことを教えてくれるからです。

まず、文章Aで述べているように、このマナーは急ぐ人、急がない人、どちらの人にとっても合理的な方式なのです。私も、急いでいる時には右側を通り、急いでいない時は左に寄ります。私はこのマナーがあつてよかったと思います。急いでいるときでも右側が空いていてスムーズに通れたり、急いでいないときも自分のペースで移動できたり。このマナーは人々の「思いやり」でできているのです。

しかし、文章Bで述べられているように、このマナーは欠点も少なくないのです。追い越し側を空けておくために乗り口で人々が長い列を作っている、というのもそのうちのひとつです。確かに二列に乗ったほうが安全かつスムーズに移動できたかもしれませんが、それも、「多くの人がスムーズに移動するためには」ということを考えれば長い列を待てない人は右側を通ればよかったのだと思います。また、この片側追い越し方式はしかたなく左側に寄るように定着したとも述べられていますが、最初は「しかたなく」だったとしてもそれはその人の「人を思いやる気持ち」によるものなのです。そういった人々の思いやりによって片側追い越し方式は定着したのです。

このように片側追い越し方式は人々の「思いやり」によってできたマナーであることがわかりました。マナーというものはこれ以外にも一部の人が始めたことが、十分に議論されないまま作られたものも多いはずですが、それ

を受け入れるのも、不満を持ちながらも賛同するのも「思いやり」なのです。ですから、少々の欠点があつたとしてもその欠点を理解し、それを改善しようとする「思いやり」を人々に持つてほしいです。